
マッドサイエンスクラブ・Go!!

有松真理亜 (原案：阿僧祇)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マッドサイエンスクラブ・GO!!

【Nコード】

N2752V

【作者名】

有松真理亜（原案：阿僧祇）

【あらすじ】

美形の科学教師のグルービーをしている春菜と、彼女を見守る幼なじみの亜樹男。ある夏、野球部が予選1開戦に勝ってしまったことから、「科学部を潰して予算を野球部に廻そう」という意見がPTAから出てしまった。これを撤回させるには、高校野球以上に目立つことをしなければならぬ。折しも「サイエンス甲子園」という化学実験の全国大会が開催されることになった。大会では実験の成否より内容の意外性が評価のポイントになるという。春菜と亜樹男は、どんな実験を試みせるべきか知恵を絞る。 某所で、科学

部ネタの企画が3つ同時にオーバーブッキングしたため自主的に没にしたネタを、ノベルでリメイクしたもの。

ここ数日、鳴浜山春菜は、どっから見ても機嫌がいい。（前書き）

登場人物

なるはまやま・はるな

成浜山春菜： 17才

高校2年生。片雪先生に対するミーハー心で科学部に入部。他の子より気が利くために割と気に入られ、それを無意識に恋愛感情と勘違いしてる。この物語の主人公。

かたゆき・ゆたか

片雪裕 23才

新任の科学教師。なぜか美形で（笑）、女子に人気があるのだが、自覚が無い。科学や物理につよい関心があり、思い付いた理論は実験してみないと気がすまない。それは時に人体実験にも及ぶ。が、悪気はまったく無い。また、家の教育のせいで天然フェミニンストでもある。

ねくいし・いくね

根九石郁音 17才

春菜の恋のライバル（？）で、科学部副部長。ただし表面上は親友面。

おの・あきお

隠岐亜樹緒 17才

春菜の幼なじみで、科学部の幽霊部長。頭は回るのだけどアバウトな性格。血液型はO型まじりのB型にちがいない。実は春菜のことが好きだが、表に出さない。

「ここ数日、鳴浜山春菜は、どっから見ても機嫌がいい。」

ここ数日、鳴浜山春菜は、どっから見ても機嫌がいい。それはもう、教室で授業中でも、油断すると鼻歌が出そうになるほど。

対して、そんな春菜を見守っている昔なじみの隠岐亜樹男は、普段より機嫌が悪い……。ように見えなくもない。見えなくもないが、あまり感情を表に出さずいつも不機嫌な印象のあるやつなため、普段と変わらないと言われればそんなに変わらない。

「女は気が変わりやすいからな」
亜樹男は、誰にも聞こえないような声でつぶやいた。

このふたりは暮井寺高校2年C組。同級生で、小学校以来のなじみではあるが、それ以上の関係ではない。
春菜にはすでに好きな相手がいるから、昔なじみ以上になりようもない。

待ち望んでいた放課後になると、春菜は後片付けももどかしく、バッグを振り回して教室を飛び出していった。
その姿を見送った亜樹男は、ヤレヤレといったようにため息をついて、ノンビリと帰り支度を続ける。

ばぁん！

音を立てて、実験室の扉が開かれた。

「鳴浜山か。扉は静かに開けるものだよ」

「ごめんなさいっ、先生！」

だが春菜の表情は謝罪のそれではない。

その教師はスラリとした長身で、けっこうな天然美形。あまり自覚がないようだが女子の人気は高い。片雪裕、25才、独身。職業

は化学の教師。

春菜もごたぶんにもれず、片雪先生に恋心を抱いてしまっている。ほとんどそれだけを目的に、去年はサボりまくっていたはずの科学部に、今年は皆勤賞並の出席率を達成しつつある。

今日も放課後が来るとともに、片雪先生の顔を見るためにやってきたのだった。

だが、今日の片雪先生はあまり元気が無い。わからない人にはわからないだろうけれど、いつも見ている春菜にはなんとなくそう見えた。

片雪先生に、いったい何が……。

科学部には、片雪裕を目的に入ってきた女子が、一時はあふれかえった。

が……片雪先生にはそんな自覚も無く、皆が科学に興味を持っていくものと思い、次々と高度な実験やその解説をはじめた。ために授業の延長のような雰囲気になってしまい、1人また1人と、耐久力の尽きたムスメが消えていった。今ではほとんどが幽霊部員となり、春菜を含めて2人が残ってるだけに過ぎない。

男子も、一気にミィハー女の集会場となってしまうた実験室に居辛くなつて、ほぼ全員が幽霊部員と化していた。部長まで……。

「そう。科学部の危機なんだ。」

片雪先生を問い詰めた春菜は、事情を聞き出した。

「すべては、去年、野球部が夏の大会の予選で、十数年ぶりに1勝したことが原因だ。」

夏の高校野球大会。それは、日本中をアツくさせるスポーツの祭典だ。高校生のアマチュア試合に過ぎないのに予選からTVで放映され、新聞もニュースも他の話題を無視してそのことで持ちきりに

なる。

柔道部が地区大会で決勝進出したりハンドボール部が県大会で優勝したりしてもたいして話題にもならないが、野球部だけは予選の1回戦に勝っただけで大騒ぎ。連絡網で電話が回され大応援団を組織し、2回戦目には校長みずから指揮をとって応援に駆けつけたりする。

暮井寺高校でも、そういうことがあった。

そのため、PTAにも教職員にも「めざせ甲子園!」というスロ―ガンが盛り上がって予算増。そのぶん、活動の地味な科学部の予算が削られてしまったのだった。

実は、女子に妙に人気のある片雪裕への、他の教師によるイヤガラセでもあるのだが、本人は知る由も無い。

「鳴浜山さん、知らなかったのはあなただけよ?」

副部長の根九石郁音ねくいし・いくねがあきれたように言った。郁音は最初からの部屋にいたのだが、春菜は今はじめて気がついた。眼中に入っていなかったわけだ。

「私はすでに、予算削減撤回を訴えて教員室や校長室に行ったんだから。ねえ、片雪先生?」

「ああ、ご協力ありがとう、根九石さん。」

片雪先生が微笑みかける。とたんに、春菜の顔がひきつった。郁音に、アドバンテージを取られた……!

「で、予算削減を撤回できたの?」

「うっ……そ、それは……」

成功していなかった。ならば、まだ春菜にも劣勢挽回のチャンスはある。

「もつどうしようもないかな」

あきらめ顔の片雪に、春菜は勢い込む。

「片雪先生、あきらめちゃダメです! まだ何か方法があるはず……

…みんなで考えましょう!」

明らかに、自己アピールを狙う芝居がかった発言。郁音たちにはそのクサさがおつたが、片雪先生にはわからなかったようだ。

「そうだね……ありがとう、鳴浜山さん」

今度は、春菜が胸を（あんまりないけど）張った。形勢逆転だ。郁音の顔に焦りが浮かぶ。

「……で、どういう方法があるというの？」

「そっ、それは……」

答えられない春菜。一瞬で立場が元に戻ってしまった。

春菜がしどろもどろになっているところへ、いきなり扉が開く。

「やっぱりここか、鳴浜山。」

亜樹男だった。

「慌てるから忘れ物。ほら宿題のプリント。」

あくまで友達としての親切。そういう態度で亜樹男はプリントを渡す。

そこへ、片雪が嬉しそうな声を上げた。

「よく来てくれた、部長！ 久しぶりだな。」

「あっ、そう言えば……！」

女子部員たちも忘れてたほど長く顔を出していなかったが、隠岐亜樹緒は科学部の幽霊部長だった。居辛くなっていなくなった男子の一人だ。

「実は科学部は……」

「ええ、話は聞いてます。」

亜樹男の態度は冷静だ。たしかに物理や化学は好きだけれど、科学部じたいにはそんなにこだわりが無い。ただ……。

副部長の郁音はイラついて言う。

「なんとか、予算を戻させる方法が必要なよ。部長なら責任とってなにかアイデア出せないの？」

「なんだよ、普段は存在も無視しといて、こんなときだけ責任おしつける気か？」

険悪な空気になりそうだったところへ、片雪先生が割って入った。

「ここで喧嘩してもいいことはないよ。」
そして耳打ち。

「隠岐、女と口喧嘩しても男は勝てない。」ここは引いといたほうが貸しになるぞ。」

亜樹男は、片雪先生に多少の反感を持っている。が、彼が女子の心を捉えるキャラクターであることには多少敬意も持っている。

「そうですね。」

だからその言うことはけっこう素直に聞いた。だが郁音はそれで調子に乗ってきた。

「で？ 早く出しなさいよ、アイデア。」

「まあまあ」

亜樹男はなだめるように掌を出す。

「そんな、ストレスを与えたっていいアイデアなんか出ないよ。リラックス。リラックスが必要だ。」

そう言うのと、実験机の上に乗リ、ゴロリと横になってしまった。なんて無神経……という女子の冷たい視線なんか気にする様子も無く、カバンから一冊の雑誌を取り出した。

「あー……っ！ 『アリスとテレス』の最新号！」

スットン狂な声をあげたのは春菜だった。『アリスとテレス』は、最近面白くなってきた科学雑誌だった。

「見せて見せて！」

「いや、俺が今から読もうと……」

「見せてっ！」

「……………ほら。」

春菜は、亜樹男からひったくるように『アリスとテレス』を取り上げ、夢中になってページをめくり始めた。ヤレヤレという顔で、亜樹男は肩をすくめる。だが郁音には笑い事じゃなかった。

「何でしょ、まあ……彼氏でも家来でもないくせに。」
春菜が反論する。

「いーじゃん。隠岐は私の言うことはきくんだもん。」

「隠岐も隠岐よ。なんでこんな女の要求に従ってるわけ!？」

亜樹男は体を起こして、

「ん……まあ俺は、帰ってから見ればいいし。」

片雪先生がぷつと噴出した。亜樹男が不愉快そうに見る。亜樹男は一息ついて

「まあ、話をだな、元に戻してだな。」

主に郁音に語りかける。

「予算を元に戻してもらおう方法が必要なんだろう？」

「そうだけど？」

「科学部らしく、理論的に対策を考えてみよう。まず野球部の予算が増えたのは、野球部に目立つ実績ができたからだよね？」

「うん。」

「で、科学部の予算が減ったのは、科学部には目立つ実績がないからだよな？」

「ええ。」

「じゃ、野球部並みの目立つ実績を作ったら、予算が増えるんじゃないの？」

ポン、と郁音が手を拳に当てた。片雪先生も感心している。

「なるほど、盲点だった！」

「けれど問題は、どうやって野球部より目立つ実績を作るかよ。野球部の『予選1回戦勝利』は、他の運動部の『県大会優勝』よりも重いんだよ？」

郁音の突っ込みに亜樹男が考え込む。

「確かにそこが問題なんだ。野球部よりも注目されるには、全国優勝かまして全国紙の新聞に載るくらいの目立ち度が必要になる。」

「全国優勝？ 科学部に全国大会なんかないでしょ、馬鹿馬鹿しい。」

あきれて亜樹男を見下した郁音だったが、突如、いままで参加しなかつた春菜の声が響いた。

「あるみたいだよ。」

亜樹男、郁音、そして片雪先生の目が、春菜に、そしてその指差す先に注がれる。

科学雑誌『アリスとテレス』。そのページの片隅に、「科学実験
全国高校生選手権大会 第一回サイエンス甲子園 開催決定！」
審査委員長：武内等先生」という、小さな広告があった。

つづく

サイエンス甲子園のルール

サイエンス甲子園のルール。

論文を提出し、審査員の前でそれを裏付ける実験を行う。評価ポイントはもちろん成功・失敗にも点数がつくが、もっとも重視されるのは意外性だという。

かなり意外な実験なら、失敗しても点数は高いわけだ。

「で、その実験を考えないといけない。」

亜樹男は腕を組んだ。

意外性のある実験？

科学というものは、理屈の積み重ねと、それに基づく実験でできている。だから実験というものは普通、すでに理屈で仮説が成り立っており、意外でも何でもないわけだ。意外な実験をするためには、予想外の仮説を立てなければならない。

片雪先生もふくめ、4人はあーでもないこーでもないと話してみたが、ろくなアイデアも出てこない。お互いがお互いのアイデアを貶すだけの小田原評定に突入してしまった。

そんなことをしているうちに、外が暗くなってきた。

「他人のアイデアはどうしてもくだらなく見えてしまうものだ。どうだろう？ それぞれが独自に考えてこないか？」

「三人寄れば文殊の知恵」……とは行かない場合もある。自信のある者が集まるとかえってモメて解決がなくなったりする。中国には「三人の諸葛亮（孔明）は一人の農夫に勝てない」という、まったく逆のことわざもあるくらいだ。

片雪の指摘は亜樹男にも納得できたし、春菜と郁音は無条件で承認だったから、その日はそれで解散となった。

春菜は一晚中考えてみた。けれど、やはりいい思いつきは出てこ

ない。

「えーとね、モーターを二つつなげて、片方を発電機にしてもう片方を動力にする永久機関を……」

「そもそも動き始めないし、仮に動かせたとしても摩擦でエネルギーが失われるのですぐ止まってしまっただろう。」

「オタマジャクシがカエルになるときに働く甲状腺ホルモンを人間に注射して、両生類のごとき変体を起こさせ……」

「バセドー氏病になるだけです。」

「元素にね、電子をぶつけて崩壊／融合させ、非金属を純金に……」
それは錬金術！（汗）

SFは、新しいアイデアを試すという点で科学より自由であるが、科学はSFと違い、実際にできることでないと意味がない。

科学に特別な素養があるわけでもない春菜に「意外性があつて実際に可能な実験」など簡単に思いつくわけもなかった。

でも……なんとしても、何か思いついて肩雪先生に認められたい！春菜はそんな思いで凝り固まっていた。そして認められたいそれをきっかけにふたりは……次第に妄想の中に沈んでしまい、朝までとうとう帰ってこれなかった春菜だった。

「隠岐！」

思い余った春菜は、翌日の放課後の教室で、亜樹男に言い寄った。「言いにくいけれど、思い切つて言うわ。」

かなり固い決意の表情だ。亜樹男も少し動揺した。クラスメートたちも二人を取り囲む。あきらかに告白を期待してる。

だが春菜が言ったのは、

「隠岐を見込んで、実験に協力してほしいの！」

「……別にかまわないけど。どんな実験？」

「隠岐の全身の細胞に全部バツタの遺伝子を注入したら、変身してバイクに乗れるように……」

「仮面 イダーかよッ！」

全員が一斉にツツこんだ。亜樹男も頭を抱えた。

「人間に何十兆の細胞があるか、知ってる？ 一つ一つ全部に、バツタの遺伝子を注入するわけ？」

「あ……そこまで考えてなかった。」

がっくりと肩を落としてしまった春菜。馬鹿馬鹿しさに解散していくクラスメートの中で、亜樹男はため息をついた。

「昨日・今日で独創的なアイデアを思いつけるものじゃないだろ。科学ってのはデータの積み重ねだ。」

「う、うん。そうだね！ ありがと！」

春菜は一瞬で立ち直ると、笑顔で手を振って実験室へと走っていく。亜樹男は、もうひとつため息をついてつぶやいた。

「ため息は 命を削る^{カナナ}砲とやら……」

春菜が実験室に行ってみると、すでに郁音が試験管を並べてなにより実験をはじめていた。

「根九石さん……何か思いついたの？」

「……別に。」

郁音は冷静に、手も止めずに答える。

「アイデアは一足飛びには出ないわ。科学はデータの積み重ねだもの。」

亜樹男と同じ事を言った。正論とは思いつつも、なぜか春菜にはそれが気に入らなかった。ムツとしつつ、自分用の実験道具を取り出す。試験管立てを置き、裏返しになっている試験管を戻していく。「痛っ！」

突然、ひとさし指に痛みが走った。びっくりして指を口に突っ込みながら見てみると……。

「ガビヨウ！？」

試験管にガビヨウが仕込まれている。

試験管はガラスだから、よく見ればわかるはずだった……怒りに

我を忘れて見落としたのだ。

春菜は、郁音を睨みつけた。こんなイヤガラセをするやつは一人しかいない。郁音は、鼻で笑うような表情を見せつつ実験を続けている。試験管では混ざった気体が軽く振られていた。

春菜は、郁音を睨みつけているうちに胸が苦しくなってきた。息も苦しくなつて、目から涙が出始め、喉が焼けるような感覚に襲われる。

（え？ これは、郁音に対する怒りのせい？ それとも……）

考えているうちに刺激臭が漂ってきて、郁音が椅子からゆっくりと滑り落ちて床に倒れるのが見えた。試験管も床に転がる。春菜も気が遠くなりかけてきた。

そのとき、突然に扉が音を立てて開かれた。

「誰だ、塩素ガスを発生させてるのは！！」

酸性の溶液に次亜塩素酸ナトリウムを混ぜると、塩素ガスが発生する。酸性の洗剤や、嘔吐された胃液などに塩素系漂白剤を垂らしただけでも発生する。

塩素ガスは比重の重い気体で、下に溜まり、目や喉などに触れると粘膜を痛めつける毒ガスだ。すぐに呼吸不全で死にいたり、第一次大戦では化学兵器としても使われた。

それでも相乗効果に期待して洗剤と漂白剤を混ぜる人が後を絶たず、事故が起きた。だから今では洗剤のボトルに「混ぜるな危険」と大書されている。

塩素ガスを吸ってしまったら、何度もうがいをし、体を洗って、完全に体外に出してしまう必要がある。

塩素は強力な酸化作用があり、逆にいえば強烈なアルカリ、たとえばアンモニアやセッケン水などで還元される。他には、水に溶けやすい性質もあるので水を撒くことも有効だ。あとはとにかく換気してその場を離れること。

このくらいの知識は亜樹男にもあったので、すばやい対策が可能だった。幸い、春菜も郁音も軽症で、保健室でしばらく休むだけで済みそうだった。

「ったく、なんであんな実験を……」

「それは……」

申し訳なさそうに郁音が答える。

「元素の電子数を変えようと……」

「ん？」

「塩素ガスには酸化作用があるじゃない？ 酸化というのは電子を奪うということだから、元素から電子を奪えば性質が変わって、もしかすると金ができるかもしれないと……」

春菜がびっくりして絶句してる間に亜樹男が、窓のゆれるほどの大声で絶叫した。

「アホかッ!？」

春菜もびっくりして目をつぶってしまったくらいの剣幕だった。

「そのくらいで元素が変化するなら、中世ヨーロッパの錬金術は簡単に成功してるよ！ 第一、毒ガスを発生させる実験にガスマスクも用意してないってのはなんなんだ!」

郁音は毛布をつかんで隠れるように

「そ、そんなキツク言わなくても……」

「下手したら死んでたんだぞ!」

亜樹男は郁音に詰め寄る。

「頼むから、俺を悲しませないでくれよ……」

「えっ!？」

根九石が死ぬと隠岐が悲しむ????? それって……

混乱している春菜をよそに、郁音は

「……はい」

と、おもわず素直に返事していた。

ふたりはしばらく休んでいたが、すぐに回復した春菜に比べて郁音のほうが体調が悪かったから、亜樹男は郁音のかばん持ちで送っていくことにした。

春菜は何か釈然としないものを感じつつ、彼らと分かれて一人家路をたどる。

（何よ、私だって病人なんだから。てゆうか、むしろ犠牲者で、根九石は加害者じゃない！ それなのになんで……）

歩きながら小石を蹴る。と、いきなり春菜は気がついた。

（あれ？ それって、私が隠岐に送ってもらいたかったってこと？）
春菜はぶんぶんと首を横に振る。

（違うって！ あいつは小学校からの腐れ縁で……私が好きなのは片雪先生だもん！）

なんとなく胸が痛いのも

（塩酸ガスの後遺症よ！）

と自分を納得させて、とにかく早く帰ることにした。

その夜。春菜の携帯に電話がかかってきた。亜樹男だ。

「調子は？」

「うん、もう大丈夫っぽい。」

本当はまだちよと息苦しい気がする。なんだか気分もすぐれない。でも、亜樹男の前ではつい虚勢を張ってしまった。

「まあ、あんまり無茶はしないように……」

「無茶したのは私じゃないってば！」

「まあそうだけど。」

亜樹男は何か言いたそうだ。

「科学部を存続させるためってのはわかるけどさ」

「何よ、私の気持ちも知らないで」

「ん？」

「!？」

とっさに言ってしまったって春菜は自分で驚いた。私はいったい何を

言おうとしたの？

だが亜樹男の返事は落ち着いてる。

「しってるよ。鳴浜山は片雪センセに気に入られたいんだろ。」

「気に入られたいとかそういうんじゃないよ！」

「ああ、わかってるわかってる。」

必死の春菜に亜樹男は面倒くさそうに答える。

「でもな、片雪を狙ってもムダだぞ」

「なんでよ!?!」

「だってあいつ、婚約者いるもん。知らなかった？」

「!?!」

春菜の胸の痛みは、塩素ガスとのダブルパンチで、もはや再起不能なところまでおついでめられた。

つづく

鳴浜山春菜は、あれから学校に来ていない。

鳴浜山春菜は、あれから学校に来ていない。亜樹男も「まずかったかな？」と思い始めた。

放課後の実験室で、亜樹男は机の上に腰を下ろし、本をめくっている。別の机では、郁音が別の実験中だ。試験管の中身を混ぜながら郁音は亜樹男に問い掛けた。

「いよいよ明日ね」

「何が？」

「サイエンス甲子園よ。そっちの実験はうまく行ってるの？」

「……まあ、試してはみようと」

「そう。鳴浜山さんはまだ休み？」

「来てないよ」

「棄権するのかしら、せつかく出場枠を取れたのに」

片雪先生は、チームではなく化学部員個人で枠を取ってきた。隠岐亜樹男／根九石郁音／鳴浜山春菜の3人はそれぞれ別の実験でエントリーすることになっている。

だから、おなじ実験室にいても別々のことをやってるわけだ。

「根九石、また塩素ガスなんか発生させるなよ？」

「し、しない、わよ……」

郁音はちよつと顔を赤らめた。失敗を恥じてるのではない。あの日、亜樹男に肩を貸してもらって帰宅したことを思い出してしまったのだった。

女子の友達とはちがう引き締まった筋肉と太い骨の、頼れそうな体の感触がよみがえってきて、ちよつと手元が震えた。

「また……毒ガス発生させたら、送ってくれたりする？」

いま郁音にできる精一杯の意思表示だ。しかし

「できるわけないだろ」

亜樹男のつれない返事に、郁音の目が険悪になる。亜樹男はそんなことに頓着してない。本をめくってはメモをとりながら続ける。

「今、発生させられたら俺も倒れちゃうもん」

「あ、たしかに……」

郁音は拍子ぬけたように感じた。でもなぜか、心臓の動悸がおさまらない。

（私、片雪先生のことが好きだったはずなのに、隠岐のこと意識しちゃってる……いや、今ではむしろ……）

そんな自覚もあった。だから、郁音は自分の本音を試してみたいと思った。

「あのさ、隠岐……サイエンス甲子園が終わってからでいいんだけど」

「なに？」

郁音は、言い出しといて困った。何かに亜樹男を誘おうとしてるのに、何にかを考えていなかった。あわてて周りを見回す。博物館のなんとか展のポスターが目に入った。

「あのさ……かつ、科学博物館。行きたいんだけど、つれてってくれないかな？」

「上野の？ いいよ。」

郁音の顔にぱっと光が差した。

「案内くらいなら。でもよく知ってたな。俺、何回も行ってること話したっけ？」

「そういう意味じゃなくてっ！」

郁音は急に拗ねた表情になる。

「????」

亜樹男にはまだわかっていない。

「あのさっ、私が死んだら悲しいって言ったでしょ!？」

「言っただっけ？」

「忘れたの!？」 塩素ガスでやられた日に保健室で……」

「ああ、あれか……当たり前じゃないか。友達が事故死したら誰だって悲しいだろ」

……………。

どれくらい沈黙が続いたろうか。

「ばかあつ！」

「どわっ！」

とつさに亜樹男が飛びのいた机の上に、試験管立てがヒットし、薬品がぶちまけられた。

そのまま郁音は廊下へ飛び出し、走り去ってしまった。

「おい、根九石！ なんの実験してたのかくらい言ってくれ！」

叫べども答えない。

「何なんだ、あいつは……」

彼女のいた経験のない亜樹男に、女心の機微などわかりようも無かった。

「また毒ガスとか発生しないだろうな？」

おっかなびつくり、亜樹男は雑巾を手取る。いそいでマスクをして、厚手のゴム手袋をはめ、割れた試験管とぶちまけられた薬剤を片付け始めた。

と、いきなり扉が開いて、化学教師の片雪裕が入ってきた。

「めずらしいな、今日は男子だけか。……うわ、何てこと！」

慌てて片雪も片付けを手伝う。亜樹男は、ガラス片を集めながらふと尋ねてみた。

「片雪センセってモテますよね」

「俺が？ 何の冗談だ」

「いや、センセを狙ってる女子って、けっこういますよ」

「隠岐、俺をだましてハメようとしてるのか」

「そんなことありません。あれ、センセ、気づいてないの？」

「気づくも何も、俺に近づく女なんてだいたい気が変わりやすいか何か別の目的があるかだし。本気の奴なんかいないだろ」

(……………こいつ、もしかして女性恐怖症？ 過去に何かあったのか?)

亜樹男は、このまえに春菜に言った嘘を思い出して心が痛くなってきた。

夜。携帯のメロディが鳴り響く。ベッドの中で春菜は力も無く電話に出た。

「あ、鳴浜山。明日はいよいよサイエンス甲子園だぞ。いいな？」

「……………うん」

「明日は出てくるんだろ？」

「……………休んじゃダメ？」

「お前が言い出しつぺだろ！一回走り出したものを個人の気分でとめたら迷惑じゃないか！」

「ご、ごめん……………」

「何でもいいから、明日だけは来いよ。春菜に手伝ってほしいんだ」

「私に？」

「だから必ず来いよ？絶対来いよ？来なかったらこっちから訪ねていくからな！？」

「訪ねて来ても意味ないでしょ！」

「あ、そうか……………」

ようやく、春菜の声に笑いがよみがえってきた。

「いいか、お前の望みは俺がかなえてやる。だから、必ず来るんだ。

集合時間はX：X Xだぞ、遅れるなよ？」

「……………うん。」

会場は、当初と変更になってつくば市の小さな体育館。

集合時刻までに来なかった春菜を除き、郁音と亜樹男、それに片雪先生の3人がやってきた。郁音が馬鹿にしたように言う。

「鳴浜山はとうとう来なかったのね。」

亜樹男は、それを聞いてちらっと時計を見た。

(メモは残してきたから、あとは……………)

郁音は続ける。

「思ったより小規模ですね。参加校も少ないみたい……」

「まあ、第一回大会なんてこんなもんだろ。これでも、優勝すれば『日本チャンピオン』にはかわりないぞ」

片雪は、まるで他人事のような口ぶりだ。

「はあ？ 参加校は暮井寺高校のみ！？」

審査員の前にいるのは、亜樹男と郁音のふたりだけだった。

「いや、やはり宣伝が足りませんでしたかね。」

「それはともかく、開催は開催だ。事実上の決勝戦だけど、がんばってくれたまえ」

事実上も空想上もねえ、と思ったものの、ここまで来て何もしないで帰るわけに行かない。まず郁音から、スライドを持ち出して実験結果の発表をはじめた。

しかし残念ながら、すでにどこかの学者が検証済みの内容で意外性に乏しく、評価点数は低かった。

「さて、次は俺か……」

亜樹男が見学席から降りて壇に立つ。

「私は……『吊橋効果』という現象を利用してほれ薬を作れるかどうか実験してみました」

「ほれ薬！？」

「その内容は、心臓の動悸を早める効果のある……」

亜樹男の発表に、一同は呆れ顔になっている。ほれ薬なんか作れるなら苦労はない。みんなそんな顔だった。

「で、これを検証しなければならいわけですが……」

そこへ、けたたましい足音とともに、春菜がメモを手に駆け込んできた。

「ごめんっ、遅れたっ！ 時間通りに来たはずなのに間違ってたの……！？」

「いいところに来た、鳴浜山。こっちだ！」

審査員たちが驚いてる中、春菜は、壇上の亜樹男の傍へ駆け寄って、膝に手を置いて息を整える。

「ほら、これでも飲んで落ち着け」

「うん」

春菜は渡されたペットボトルを一気飲みした。周囲がざわめく。

「あれ？　なんか、変な味……」

「春菜っ！」

「はいっ！」

突然、亜樹男が怒鳴ったので春菜は硬直した。

「お前が好きだ。俺と付き合ってくれ」

「ええっ!?!」

驚いたのは春菜だけじゃなかった。郁音なんかは

「ちよつと、何よそれ！」

と、いまにも見学席から飛び込んできそつな勢이었다。

「返事は今ここで！」

「え、えつと……」

春菜は、心臓爆発の状態でちらつと片雪を見る。片雪は不思議そうに見つめている。

(片雪先生には、婚約者が……)

春菜は、あまりに激しい心臓の動悸に、意識が遠くなりかけた。

そこへもう一度、亜樹男の声が聞こえた。

「好きだ。俺と付き合ってくれ」

「うん。私でよければ」

おおーっ、と周りから歓声が上がった。

「これで検証を終わります」

亜樹男が一礼する。

「え？　え？　え？」

戸惑う春菜を導いて、亜樹男は段を降りた。

拍手と罵声とが混ざる。中には「やらせた、捏造だ、アヒだ！」という声も聞こえた。

そんな喧騒を審査委員長が抑えた。

「えー、審査委員長の武内等たけうち・ひとしです。なかなか興味深い実験でした。ありそうでない発想ですね、ほれ薬とは面白い。たしかに彼が調査した液体は、理論的にも心臓の動悸を早めるものです。実際に効果があるかどうかは実験を重ねないと検証はできませんが……やつてみようとしたチャレンジ精神を評価したいと思います」

会場が拍手で包まれた。審査委員長がこんなコメントをしたため得点もうなぎのぼりとなり、圧勝が確定した。

「ど、どういうこと？」

春菜は事情が飲み込めていない。

「鳴浜山が飲んだのはほれ薬。だから、俺の告白にすぐにY e s の返事をしちゃったんだよ」

「なに、じゃあいま『好き』って言ったのは……」

「もちろん実験」

その瞬間、疾風のようなグーが亜樹男の右の頬を叩きのめした。

「付き合ってたって言ったの、とりけし……」

春菜はそのまま走り去ってしまう。

「いって……」

亜樹男が起き上がると、そこに郁音が立っていた。

「あつ、根九石」

が、郁音も、者も言わずに左の頬に拳を叩き込んだ。

遅刻で走ってきたために心臓の動悸が激しかったということ、そのためにあえて間違えた時間を教えた亜樹男以外には知る由も無い。

しかしどんな大会だろうと、「全国優勝」には間違いない。都合のいい情報だけ伝えようと、教職会議もPTAも騒ぎ出し、科学部の予算削減は撤回された。

亜樹男のウソもばれ、春菜はあいかわらず片雪先生のブルービー状態に戻った。そして片雪先生はそんな自分に気づいていない。

ただ、前と変わったのは、春菜が亜樹男の存在をなんとなく「意識」するようになったことだ。迷いを見せるようなこともあった。でも亜樹男はあせらない。

「やるだけのことはやったし。あとはなるようになるでしょ」

その日は実験室に行かなかった。春菜に少しでも楽しい夢を見させておいてやりたい。そんな気持ちだった。

廊下を歩いていくと、郁音が壁際に立っていた。

「根九石か。これから実験室？」

「ううん。今日はもう帰るつもり」

「そうか。俺もだ」

「じゃ……じゃ、一緒に帰る？」

「いいけど。どういう風の吹き回し？ 鳴浜山と片雪先生を奪い合

つてたんじゃなかったの？」

「……女は気が変わりやすいのよ」

「そう。じゃ、また気が変わる前に付き合ってもらおうかな」

「！」

郁音はいきなり亜樹男の腕に飛びつくように、自分の腕をまわした。

亜樹男の「付き合ってもらおうかな」という発言の意味に関する解釈の相違で、翌日からまたひと騒動もちあがるのだが……それはまた別のお話。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2752v/>

マッドサイエンスクラブ・Go!!

2011年8月1日03時18分発行